

○ 第2回研究会

- 日時：2007年7月27日（金） 13:00-17:00
- 場所：京都大学工学部4号館4階 大会議室（AA447）
- 発表者と発表タイトル（敬称略）

・西谷 大（国立歴史民俗学博物館、考古学・人類学）：

「生業と市からみた環境利用と生業複合体 —雲南省者米谷を事例として—」

<発表要旨> 中国雲南省の南でヴェトナムと国境を接する金平県の者米谷は、地政学的には中国という巨大な国家の辺境に位置するとともに、山と谷がおりなす複雑な地形であり、8つの少数民族と1つの集団が暮らす多民族地帯である。者米谷の各民族・村は多様な生態的な環境を、それぞれに多面的に利用するため、同質で差異のない生業戦略が並列的、均一的に展開しているのではなく、反対に生業戦略に独自性と差異性が存在する。そしてその差異性は定期市＝交易を介することでより促進されてきた。者米谷の環境利用と生業の特徴は、多様な生業戦略が集合し相互に補完しあう「生業複合体」を形成していることだといえる。

・森田敦郎（東京大学大学院総合文化研究科、文化人類学）：

「タイにおける農業機械技術の発展とその基体：実践のアレンジメントとその時間－空間的構成に注目して」

<発表要旨> タイでは輸入された機械の修理と改造の中から、独自の農業機械技術とその担い手となる職業集団が発展してきた。本発表ではこの相互構成の過程に注目して、技術的な能力と社会性の生成の母体となる人とモノの「配列＝アレンジメント」を描き出す。さらに、工程を移動する原料、部品、中古工作機械の流通、労働者の職業移動に注目し、実践の場で形成されるアレンジメントを広範囲にわたる移動の網の目の中に位置づけていく。この網の目は、かつてデュルケームが社会の物質的な基盤とみなした「基体」の今日的な形態と考えることが出来よう。